

山を開し豪雲といへる悪僧を懲らしたりなど巷談街説まちくなりければ平家へのこれをきつて易からぬとにもひ厳しく詮義ありければ辨慶も今の都も足をといめがたく些の知音あるをたよりて泉州堺の方へおもむかばやと夜をこめて浴を立出八幡越にぞさしかりぬ

武藏坊辨慶物語卷之九終

武藏坊辨慶物語卷之十

第十九回

阿部野街道よ辨慶衆賊を壓しにす
浅澤第宅よ姫松鯉魚の怪に悩まざる

武藏坊ハ頻道を急ぐものから浴を出て足よ任せ八幡を越橋本の邊りよさうりゝるよ時ハ將に冬の末にして寒風はげしく空かき曇りて雪さへちらく〜と降出し寒さたえがたく手足もこゝへ殆を行なやみしに遙あなたに燈の光り見えければ扱ハ人家にやとうれしく近よりて見るよ人家よあらで只在る山陰よ雲のごとき大漢兒車座に居ならび枯枝をあつめ焚火して居りつ辨慶ハ是を見て這奴們ハ定めて野武士山客の類よして此山路に網を張て往來の旅客を俟あるべし何程の事やあらんと馬歩にあゆみよりて大勢よ對ひ愚僧ハ叡山の者なるが俄頃ハ和泉の方へ要事ありて斯夜を冒して赴くものなるが寒さよ耐がたくて頗る難義にあよべり何卒雲時が問其火よあたらせて玉ゐるべしといひかけて大勢の中へ入つて入れバ山客們ハ呆れはて、辨慶が爲躰を熱と打ながめツ、片よりて火にあたらするよ辨慶ハ大き

よ歡よろこびこかたじけの添りやうあしと兩足りやうあしをふみ出いて火かをかきおこして居ゐたるに其うち一人手拭てぬぐひもて深ふかく
 面おもてをつゝみたる者武藏坊むさしぼうが形相かたちさまを右視みぎみ左視ひだりみて汝なの武藏坊むさしぼう辨慶べんけいをならずや奈何いかにか豪雲がううんを見忘みわすれし
 か去いる日の恨うらみを返かへさんと此日頃このひごろ汝なを待まちつゝ既すに久ひさしと手拭てぬぐひをなぐり捨すつる面おもてを見れば日外いつぞう耳みみ
 鼻はなをそぎたる西塔さいたうの豪雲がううん僧都そうどうあり辨慶べんけい阿々あゝと嘲笑あざわらひ汝なの佛弟子ぶつでしの身みを以もつて罪つみなき人を罪つみよお
 とす惡業あくげふたちまち其身に報むくひ三世さんぜの諸佛しよぶつ我手われてを借かつて汝なを罪つみしたまふ是因果これいんぐわい敵面てきめんの道理だうりなる
 をいまだ悟さとらず却かへて我われを怨うらむ是僻これひがたの甚はなはだしきならずやと從容じゆようとして駭おどろかず尙なほ悠ゆう々くと火かよ當あた
 りて居ゐたりけるに豪雲がううんの左右さかくの應いへなく傍かたへの人々ひとに向むかひ豫かねて其許おんか等に語かたりたる我われ深あき仇あ
 敵たかの這奴こやつなり疾さく我われを扶たすけ打殺うちころしたまはるべしといふ言下ことごと大勢やまだちの山客さんかく等ら心得こころえたりと一同いっとうよ
 拔連ぬきつれて斫きつゝるに辨慶べんけいの絆こともせず小癩こさかなる蠡うじ出でめら無益むえきの殺生せつせうとい思おもへども飛とんで燈ひよ
 入いる夏なつの出でみづから來きたつゝ死しを招まねくうへから跡あとへ引ひぬ天窓あたま役やく引導いんどうわたくししてくれんずと長なが
 刀やたを車輪ぐるまのごとく廻まして多勢たせを相手あひてに切結きりむすぶよそや焚火たきも消きがてなるに雪ゆきをあかりに追おひ
 まくりつ戰たたひしが素もとより野武士のふし山客やまの類たぐひなれば争いか辨慶べんけいが修練しゆれんよおよぶべき忽たちまち閃ひらかす長なが
 刀やたの光ひかりりと俱ともに豪雲がううんの二段ふたまたになつて仆たれ伏ふせぬ殘のこる黨ともは是こゝを見て逃にげんとするを此首こゝ彼首かゝよ追おひ

つめ終つひに悉ことごとく討取うちとり一息ひといき吻くちとつぎて雪ゆきを搦つかんで咽のんをまめし頓やがて荷物にものを肩かたに引ひかけ禪杖ぜんじやうを携たづめ
 へ泉州せんしゆの方かたへ急いそぐほどにゆきくゝて其夜そのよの七ツななすきとも思おもへき頃あべ阿部野街道あべののにさゝかゝる
 に尙なほ雪ゆきの玄くろきり降ふつもりて野のも山やまも只ただ一面いっぺんの銀しろをまきならべたるがごとく寒さむさたへが
 たきに只在ただ農家あゐの門邊かどを過よりしに裡うちにて人聲ひとこゑしければ少刻せうこく勞うを休やすめ往ゆくやと頓やがて内うちよ入いて
 見るよ二人ふたりの漢兒あのこ地爐ぢろの端はたよ酒酌しゆしやくかひして居ゐたりければ辨慶べんけいの大きおほき歡よろこび愚僧ぐそうの往來わうらいの者
 なるが雪ゆき中の道みちよ行ゆきやめり價あたいの望のぞにまかせてまねらせんよ其酒そのさけを一盃いっぱいかちあたへ玉たまの
 れといふよ主人おんの漢兒あのこ開ひて大おほき怒いかり我われ々々さへ足たらとおもふ酒さけを争いか汝なを分わかちあたふべきみ
 れバ法師はふしの身みよして飲酒いんしゆの五戒ごがいの第一だいいちと聞きよ凡俗ぼんぞくの我われ々々よ對たいして酒さけを覓もとむこそ易やすからね與あた
 ふる事ことの扱さちきて早く爰こゝを立去たたずバ目めにも見みせんよ醉より乗のりて罵ののしければ辨慶べんけいも大きおほき
 悲いりなごてさバかりの事ことを汝なよあらふべき殊こと又また價あたいを出いださんといふよ吞のまざるのみか土農人ちのうじん
 の分際ぶんさいとして我われに對むかつて惡口あくぐちするこそ不敵ふてきなれ汝なが們らがあたへずとて我われ吞のまざる置おくべきやといひ
 さま傍かたへにありあふ壘とりを取とりて只ただ一息ひといきに飲干のみしければ兩人ふたりの大きおほきいかり憎にくき法師はふしめが進止しんしか
 ちと在あるふ拐かを取とりて打うつゝれば辨慶べんけいの足あしをあげて一人ひとりをけたほし今いま一人ひとりが首筋くびすぢつかみ力ちから

よまかせて投いだせば破れかゝりし壁つきぬけて表の方へ二三間もんどりうたせて仆れ伏す此勢は恐れけん二人のこそくと逃行ハ辨慶ハ獨打笑み尙紙燭してそこらあたりを探し覓るよ板厨の内よ一壘の酒と乾魚とありければ大きに歡びこれをもまた飲尽し心の中よおもふやう這奴等家を捨て逃行しハかならず其友をかたらひ來り我を捕へんとするあるべし渠等がごとき土民幾万人來るとも怖るゝよたらねどよしあき暇取て夜明なば便宜あしゝと頓て酒の價ほど錢を壘の口よ結つけ明ぬ間よと其處を出て塚の方へ急ぎけるがたちまち耳元よ鉦の音かまびすく聞えければ扱こそ我おもふにたがはず鉦をあらし相圖をなして村中の人を集ひ我を擒へんとするなるべしと頻りよ足を早めて急ぎけれど今まで冷こごへたる折から多くの酒を飲し事おれば十分の酔を發し一步の高く一步のひきく浪々踏々として行こと幾干ならずして雪の中よ撞と轉びしが其まゝ前後もえらす高軒にて臥しにける姑くありて何ものによ矢庭に左右より辨慶が手をとつて引起す者あり武藏坊漸く此時目覺醉眼朦朧としてあたりを見廻すよ夜全くあけて其さま獸獵に出たりとおぼしく弓矢を携へりゝしく打扮たる一個の武士左右に許多の勢子を從へ威風凛々として床几よかり扣へたり辨慶

ハ此形勢を見て大よ怒り汝等何奴なれば吾快く眠りおたる所を引起して可惜酔を醒させたるぞといひさき捕へし手とふりはらへバ力餘りて二人の勢子等ハ雪の中へのけさまよ撞とまろぶよ彼武士信と睨まへ此程野武士山客所々に隠れ栖て夜毎よ此安部野街道に出て往來の人をなやますよし是によつて此所等邊の民家よハ各々相圖を定めおき倘怪しき者來る時ハ鉦を鳴りて人を聚ひ盗人を捕へんとすると聞り然るに我今朝しも未明より獵よ出たる遠近よて夥しき鉦の音聞へしハ扱ハ彼盜賊此邊の民家を犯すと見えたりと思ひしに案よ違はず此所よ來つて見るよ心得がたき汝が形相殊よ此邊に住る盜賊の首領といふハ大の法師なりと聞に汝が爲 鉢實の僧とハ見へざれば問すと知れし強盜の魁首なるべし早く白狀して縛めをうけよと烈しき下知よ大勢の勢子立かゝらんとするを辨慶ハ手をあげて暫いとあしどいめ我ハ全くさる怪しき者よあらず武藏坊辨慶といふ者なるが子細有て泉州塚まで赴んと夜を肩て道を急ぎしに昨夜の雪よ殆々行なやみ彼處なる農家よいりて酒を乞て呑しが其酒に酔て思はず爰に臥したるなりと語るを聞て彼武士ハ眉を蹙めそハ何とかな宣ふ其許が名の武藏坊辨慶とらえからば外日橋次季春といふ人と共侶よ沼島におゐて海上の灘丸を退

治し玉へる豪傑にあらぬかといふは辨慶聞てつやく心得ぬ面色にていかにも我こそ金
 賣橋次と義を結びたる武藏坊辨慶なり其許何とて吾名を知り且沼島の灘丸を討たる事を
 さへ知りたまふや最不審と聞より彼武士慌忙ふためき衝と立て辨慶が手をとつて上座に推
 居へ辞を正しふして云らく師父最前よりの不禮のだんく幾重も御赦しを蒙りたしと
 ばかりにてはさこりあやしく思つらんが小子の當國淺澤小野の隠士岸の左衛門大江匡博
 といふ者なり嚮よ吾娘姫松摩耶詣の折うら彼灘丸が爲に捕へられよ其許と橋次ぬし兩人
 よて灘丸を打取り娘をすくひ玉はりしよと季春ぬしの物語よて詳よきつ何事のありてや
 此雪をもちとひたまはず和泉へは赴きたまふや何の兎もあれ先我第宅よ來りゆるくと勞
 れをやすめ其後赴きたまふとも遅きにあらじと他事をき詞に辨慶ハ快然として歡び扱ハ姫
 松どの、御父君たる岸の大人よてさむらひしか斯窶々しき形勢にて雪中よ仆れ伏しおたれ
 ば盜賊白挺とも見たがへたまふも理なり我何とてさばかりの事を心にかくべき此うへハ辞
 にまかせ君の館よ至り委細の事を問も一問れもせんと聞て左衛門匡博ハ然ハとて共侶よ淺
 澤の館よ返りければ左衛門ハ頓て山海の珍珠を安排してまづ辨慶よ勸るにぞ武藏坊ハ其管

侍の厚きを謝し快く數盃を傾けて後匡博よ對ひ橋次姫松等に別れてより明石の浦にて絆故
 なく觀慶阿闍利を救ひまいらせ岡山の泊まで送りといけりれより洛陽に竊登り叡山にいゆ
 きて豪雲をこらし尙邦綱をも恨みんと洛中を彷徨りしかど詮義さびしきをもつて虚しく和
 泉の方へ赴くと來りしなり其後姫松ぬしよハつゝがなくておとすならんと問かけられて匡
 博ハ愁然といふやう吾娘一旦火坑に陥りしかど其許等の勇猛よよつて幸ひハ賊徒の爲
 よ恥しめられず然るに姫松家に還りてより不思議あるハ夜に至れば物におそはるゝとどく
 海より續きたる庭前の池水さハくと音すると等しく家鳴震動し其丈六尺有余の金鱗の鯉
 魚彷彿とあらざれ眼を怒し確と白眼人のごとく詞を出し恨しや我今まで人の妻娘の別なく
 強奪して閨の伽とせしよ汝のみ心づよくも我心は随はず去よよつて憂目見せおきなハ自
 から心解て色よき返事をもなすべしと一間に推籠れひたるうちに辨慶橋次が爲よ竟には
 かなく討れたり其無念骨髓よとほり死してもなを忘れたく這奴等よ怨みをばらさんといふ
 もへども渠等ハ世よまれなる孝子英雄にして近よる事あたはず茲を以て吾最期の一念日頃
 愛翫せし鯉魚の置物よ還着して汝を陰司へ誘ふなれ來れや來れといふ聲して口より一道の

水氣を吹出せば彼水氣のうちより數万の小鯉魚あらわれ出で娘が總身は喰ひつきてなやまずよぞ娘のあら痛や耐がたやと悶苦しむ事終宵にして漸く曉頃にしたれば鯉魚の怪の原の池に飛入て跡なくなれり是よよつて加持祈禱の類さまざま心を尽すといへども更露ばかりも驗なく娘の日に増し顔色憔悴し殆々命も危し我苟しくも儒門の家は生れ粗周公孔子の書を讀三綱五常の道は背りざるに奈何なる天命もや只一人の娘を盜賊づれの冤魂の爲に一命をとらるゝとは是非もなき事どもなりと兩眼に涙をうかめて物がたりけれは辨慶の大きに駭きいりよもその折から親鯉魚の怪異をば見たれども然までの事にはあらじと思ひしよ扱の灘丸が怨魂執念深く冥縁て思ひをかけし姫松御前をなやますと覺へたり我れ不意此首に來りしこそ幸ひ今宵姫松ぬしの枕邊に通夜して彼怪物の正体を見顯しまいらすべしといふよ左衛門匡博の斜ならず喜び豪傑斯宣ふ上の心やすしと頓てその夜武藏坊を姫松が閨房に誘ひ姫松にも委細をかたりけれはよろこぶを限りなくあつく辨慶は謝しぬ斯て武藏坊のいつもの禪杖を傍よ置き今や遅しと待ほどよ案のごとく四更の頃ともおぼしきよ池水ざんく音して霧のごとく水氣室中に満るとひとしく丈拔群にして鱗の光りの金色あ

る鯉魚忽然としてあらわれいで姫松は飛かゝらんとする所を辨慶の禪杖をとつて振動かし忽ち長刀となし鯉魚をめがけて發矢と斫れば鯉魚のそのまゝ庭の面へ遊行を續いて追欠れば鯉魚のほとこの池に飛り水上を遊ぎめぐるよ忽池水の紅ひよなれり辨慶は長刀からりと投捨池の中へさんぶと飛こゝ手どりよせんと此首彼首へ追詰追めぐるよ鯉魚の波をけたて荒まゐるを辨慶は難なく小脇にかひこゝ力を極てぐつとしめて頓て汀に遊ぎつき大音聲よ鯉魚の怪の武藏坊がとめたり人々早く出合玉へと呼はりつゝ鯉魚を陸へなげあげて其身も續ひて飛上りぬ此物音におどろき左衛門はじめ家臣のめんくゝてんでに雪洞を携へはしり來り見るよこの奈何に六尺あまりの鯉魚とおもひしに然らなくて漸く二尺に足ざる印子の鯉魚の置物なりこの不審やと人々立よりて改め見るに此置物は辨慶が斫付し長刀の跡ありけれは大きに駭き更よ其由縁をあらす其時辨慶匡博に對ひ物千歳を經るときはかならず怪をなすと聞き殊に此印子の鯉魚の唐土玄宗皇帝沈香亭におひて翫びたまひし物を聞き加之彼灘丸が一念秘藏の器物に還着してかゝる怪異をなしたりと覺へたり憎き賊徒が執着かな今ぞ怨靈得脱なし成佛せよといゝさまよ禪杖をあげてきたゝりよ打けれは不測や

印子の鯉魚ハ忽ち微塵よくだけ一道の白氣陰々と西のそらへたなびきければ扱ハ怨念も立去しものあるべしと頓て其碎けたるをば岸の左衛門が菩提所東生郡の北にありけるその寺内ハ埋め跡懇よ弔ひける今猶網島よ在る所の鯉塚ハ是なるや否考ふべし斯りし後の姫松が病も本復しけれハ家内の歡び營ふるよものなく是全く武藏坊が勇猛のなす所ありとて深く辨慶を稿ひ此所の浴は遠く身を竊びたまふに便りよければいつまでも止まり居て時節の至るを待たまへとす、ゆければ辨慶ハ實よもと此年の爰にとまり明れば治承三年如月の頃にもなりければ早晚平家の詮義も薄らひけるよぞ左右よ義經公の事心よか、れば一旦奥州に下り御曹司の安否とも訪まいらせ且ハ都の動靜をも告げやと左衛門親子に暇乞をなし陸奥さして赴きける

第二十回

黙龍庵よ武藏坊主君を諫む
浮島原よ御曹司兄の陣に至る

辨慶ハゆきくつて奥州に至り平泉の邊りよて義經公の噂を聞よこハ奈何御曹司ハ父母の菩提の爲入道したまハんと志願なりとて郎等よハ悉く暇をたまはり衣川の邊りなる福壽山

無量壽院といふ寺に一箇の庵室をまつらひ晝夜こゝに閉こもりて物いみじ讀經のみしてねハ一ますと聞しかハ大きに駭き彼君ハ幼稚をりから鞍馬にて既よ出家したまふべき所を密に下山し自ら當國に下り秀衡朝臣をかたらひ大義の思立あるがゆへよ去歲も平家の動靜をうかハんと再び浴を登りたまひしに今又遁世の思ひを起し閉こもりねハすとハ何とも以て心得がたし疑らくハ當國にも平家の隱目附あらんとを議りて斯ハ世にうたハせ計を帷幕の裏にめぐらして勝事を千里の外になしたまふにハあらぬかと東様西様思ひたゆたい彼無量壽院にいゆきて對面せん事を乞よ一人の法師出來りていふやう御曹司ハ當寺の境内なる黙龍庵といふ庵室に閉こもりたまひ敢て人に遇事をゆるしたまハず其許行たまふとも其甲斐なかるべしといふよ辨慶答て吾儕ハ西塔の武藏坊辨慶といふ者なり見たまふごとく釋門の身あれハ俗客とハ事かはりて苦しかるまじ枉て對面をゆるしたまハるやう傳致て下さるべしといふよ彼法師頭を打ふり否々彼菴にハ裡より堅く鎖したれば縦寺中の者なりとも物忌はつるまでハ入事を赦したまハぬ者を奈何なる因ありとも何ぞ赦し玉ふへきや疾還りたまへといふを辨慶ハ推返して頼むと再三度よ及びけれど法師ハ更に聞入すさてく汝ハ

聞^きけのなき者^{もの}か早くかへらずに奴僕等^{しもべら}に言^いつて敲^{たた}き出すべきぞと威丈高^{わたか}よ言^いければ
 辨慶^{はんげん}奮然^{ふんぜん}として眼^{まなこ}をいからし吾^{われ}の御曹司^{おんそうし}と三世^{さんせい}の約^{やく}をなしたる者^{もの}なれば強^{しひ}て對面^{たいめん}を乞^こよ
 執^とつぎせざるのみか敲^{たた}き出すなど、いふもそ易^{やす}からぬ其^{その}黙龍庵^{もくりゆうあん}とやらん何^{いづか}方^{かた}ぞ疾案^{しやくあん}内^{ない}
 せよといふよ彼^{かの}法師^{ほふし}の色^{いろ}を失^{うしな}ひふるひく黙龍庵^{もくりゆうあん}のかたを指^{ゆび}さしければ辨慶^{はんげん}の頓^{とん}て本堂^{ほんだう}を
 打^{うち}めぐりて見るよ爰^{いづこ}に一箇^{いっこ}の門^{もん}あり這門^{この}の内^{うち}こそ黙龍庵^{もくりゆうあん}なりとおしむるよ武藏坊^{ぶざうぼう}の打点頭^{うちまんと}
 最早^{もはや}汝^{なれ}の用^{もち}ふしといふよりはやく法師^{ほふし}の慌忙^{あはてふため}に逃^{にげ}行^{ゆき}しが何^{なに}思^{おも}ひけん潜足^{かづみ}しつ、立戻^{たちもど}り小
 蔭^{かげ}へこそ忍^{しの}び入^{いり}ぬ辨慶^{はんげん}のやをら門^{もん}の邊^へりよ千^ちみ裡^{ちり}の爲^{ため}体を窺^{うかが}ふ障子^{しょうじ}引立^{ひきた}御曹司^{おんそうし}の聲^{こゑ}と
 れぼしく高^{たか}かよ讀經^{よみきやう}したまふに辨慶^{はんげん}の立^{たち}よりて扉^{ひら}をほとくと打^{うち}た、きいかに我^{われ}君^{きみ}武藏坊^{ぶざうぼう}
 こそまゝ候^{まは}余^よ人^{じん}のともあれ爰^{こゝ}を明^{あけ}て對面^{たいめん}をゆるしたまへかしと聲^{こゑ}をかざりに呼^よべど叫^よべど
 只^{ただ}軒端^{のきぶ}よ音信^{おんしん}る、松風^{まつかぜ}ならで誰^{たれ}答^{こた}ふる者^{もの}もなし辨慶^{はんげん}のたまりかねあまりと申^ませば御心^{おんこころ}つよ
 し斯^{かく}までよいふを聞^ききたまはず此^{この}所^{ところ}よて腹^{はら}かき切^きて相果^{あひはつ}べーといひかけて門^{もん}の邊^へりよ
 動^{うご}下^かと座^ざし既^{すで}にかうよと見^みゆるにぞ障子^{しょうじ}の内^{うち}よ聲^{こゑ}ありてやれ待^{まち}武藏坊^{ぶざうぼう}はあまりぞと障子^{しょうじ}ひら
 けバ御曹司^{おんそうし}ありよかむる御姿^{おんすがた}髪^{かみ}はれどろよ亂^{みだ}したまひ鼠^{ねずみ}の衣^{ころも}殊^{こともし}勝氣^{しやうけ}に數珠^{じゆじゆ}つまぐりて

あはずにぞ辨慶^{はんげん}の此^{この}爲^{ため}体^{たい}を見て且^{また}はぶり落^おつ涙^{なみだ}をそらひなごて我^{われ}君^{きみ}にハ斯^{かく}心^{こころ}弱^{よわ}くおそいた
 まふや日外^{につぎ}五條^{ごじやう}の橋^{はし}にて逃^{にげ}まいらせしとき仰^{おほ}よれたとひ昔^{むかし}に兼^{かね}戈^がを枕^{まくら}にしてなりとも父^{ちち}
 の仇^{あだ}清盛^{せいせい}はじめ平家^{へいけ}の奴原^{やつばら}盛^{せい}一^{いち}よなさんと最^{さい}勇^{ゆう}ましく聞^きえしよ今^{いま}斯^{かく}佛門^{ぶつもん}よ入りたまはん
 とハ寔^{まこと}に言^いがひなき御心^{おんこころ}かお大丈夫^{だいじやうぶ}此^{この}一言^{いちごん}ハ駒馬^{こま}も及^{およ}ばずとこそ聞^きはべるよ僅^{わずか}の問^{あひだ}に然^さる
 御心^{おんこころ}よならせたまふハ奈^{いか}何^{なに}ある天魔^{てんま}の魅^ま入^{いれ}よて此^{この}首^{くび}邊^へりたりの賣^{まい}僧^{そう}めらよ誑^{たぶ}らかされたま
 ひしならん逸^{はな}く御心^{おんこころ}ひるがへし秀^{ひで}衛^ゑ朝^{あそ}臣^{しん}を頼^{たの}みたまひ奥^{おく}羽^うの勢^{せい}をかり催^{もよほ}し都^{みやこ}に白^{しろ}旗^{はた}をひる
 がへしたまハ平家^{へいけ}の暴^{はう}逆^{ぎやく}をば年^{ねん}來^{らい}諸^{しよ}人^{じん}爪^{つめ}彈^{たま}して憎^{にく}む折^{をり}からなれば源^{げん}氏^し舊^{きゆう}恩^{おん}の輩^{たぐひ}諸^{しよ}國^{こく}よ
 りはせあつまり一^{いっ}舉^きして平家^{へいけ}を亡^{ほろ}し再^{また}び源^{げん}氏^しの御^{おん}代^{しろ}となさんと親^{まの}なり御^{おん}まも聞^きえまいらせ
 しごどく辨慶^{はんげん}生^{せい}佛^{ぶつ}のむかし書^{しよ}寫^{しや}山^{さん}よあいて夢^む中^{ちゆう}よ老^{らう}僧^{そう}の告^つもはべればごどく御^{おん}姿^{すがた}あらた
 めたまへ其^{その}外^{ほか}又^{また}聞^きへまいらせたまき事^{こと}澤^{さわ}あれど沓^{くつ}をべだて、かゆきをかくと爰^{こゝ}よりハ申^ま上^あが
 たかり疾^とく戸^こを開^{ひら}きて御^{おん}通^{とほ}下^{くだ}さるべーとき、御^{おん}曹^{そう}司^し頭^{づか}を打^{うち}ふりたまひ否^{いや}とよ辨慶^{はんげん}音^ねい
 とけなき時^{とき}佛^{ぶつ}門^{もん}に入り一^{この}義^ぎ經^{きやう}一旦^{いつたん}鞍^あ馬^まを下^{くだ}山^{さん}おし平家^{へいけ}を亡^{ほろ}し父^{ちち}の鬱^{うつ}憤^{ふん}一^{いつ}族^{しゆく}の修^{しゆ}羅^らの妄^{まう}執^{しやく}
 はらさんと思^{おも}ひしかども熟^{じやく}考^{かう}ふるに一^{いつ}盃^{はい}の水^{みづ}よく一^{いつ}車^{しや}薪^{しん}の火^ひを消^け事^{こと}あたはずとやらん縦^{よこ}

や一人や二人の郎等ありともそれを頼みに懸ひなる事を爲出さんには恩ある秀衡をさへ連累する同前それよりの迎も微運の此義經佛門よ入て永く一族の菩提を訪こそまじならめと佐藤兄弟龜井駿河の面々にもおもふ旨をきこへ知しことごとく身の暇をとらし我一人此庵室よ閉居して行ひすます窓に來て我道心を妨ぐるの全く外道の武藏坊もはや三界よ家をき義經なれば上よ君なく下よ臣なし然れど汝今目前よ生害なさんとする形相あまりよ不便なれば飛行を破り其死をとめしれ吾が寸志なり今生の對面これかざりぞと言捨て障子をばたとさきりて寂寞として音もなき辨慶今の詮かたなく扱ひ我君本心出家したまふ御心とおぼへたり嗚呼言がひあきとやいはん臆病とやいはんよししく此上の吾れ壹人なりとも彼泊海公よならひ竊よ浴へ推しのぼり此大長刀をもつて淨海が首さらへ落しくれんずと大音聲よ響り悠々と立去んとするよ以前の法師寺中の惡僧ばらをかたらひ立忍ひて居たりけるが此時ばらくとあらわれいで容子の残す立ざつて反逆人の武藏坊先よ五條の橋よて千人切をなし去年の冬又叡山よれぬて豪雲僧都を劫かせ無頼の惡僧いざ尋常に細か、れと棒千木利器をとつて打てかゝるよ辨慶のからくと嘲笑ひ小指にだも足ねど武藏坊

が歸洛の手宮筒此世のいとまをせとらせしてくれんと大長刀をふりまひせば右往左往に散亂すはじめの法師大ひにいらつて太刀拔をばめ切てかゝる折からに何國ともなく一本の素箭飛來つて彼法師が胸板よ發矢と立バ何かのつてたまるべき叫ぶのつけよ反かへれば武藏坊は是を見て阿那いぶかゝりやと見かへることあたの黙龍庵の障子をひらき立出でたまふ義經公以前よかわる御形相烏帽子狩衣さひやかよ重藤の弓携へ椽の上に衝立たり左右に何等しく鎖帷子小手鷹當に身をかためたる兵ども君を守護し扣へたり登時義經公莞爾と打笑みいかは辨慶かならず心を勞する事あかれ吾汝も別れてより再び東國ふくだり時の至るを待ちちよも片時も忘れぬ大義の企て時々相譚ふ味方には是なる佐藤忠信嗣信をはじめ皆是一人當千の兵なれど平家の隱目付當國にも徘徊なせばわざと表よ佛道を歸依し出家遁世の望ありと家臣等にの暇を取し此庵室に閑籠晝夜讀經よ日を送り深更に及んで私に件の人々を聚ひ専ら軍議を評論す夫疾々門をひらき武藏坊をこなたへと宣ふ詞に一人の武士やをら立て門をひらけば辨慶の大きよ歡びす、み入に仆れ伏したる以前の法師むくくと起上り御大將もはや愚僧が役目の濟たるならんと正首だちて武藏坊が後に従ひ疎々入れば弁慶の且駭き

且怪み義經公も對ひ君の御矢先よかりて落命せしと思ひしに然らばかくて恙なく且今の辭
 の空く敵よあらじと思ひ抑此法師の何人よやと眉をひそむるに義經公打笑せたまひいま
 だ知るまじ此法師の常陸坊海尊といふ者なり我汝が心をうたがふるよあらねども笑の中
 よ刃を磨ぐ亂世のあらはし人情反覆世の常と聞ものから倘やと思へば豫て海尊にも其心を
 得ざし置たれバ僅汝を試しのかならず心よかくる事なれ其他逃散たる僧徒も皆是當
 寺の者にして義經よ心を傾けて事ふる者なれバ少しも心をおくに及ばず又最前海尊も射か
 けたる矢も鏃を抜おひたれバ常陸房も恙なし此後ともへだてなく相譚ひて我を助け稀世
 の功を立よかしと残るかたなき名將の詞にはつと感激し夫より佐藤兄弟はじめ龜井駿河等
 よも名對面して俱に軍議をかたらひける斯て猶弁慶等のさまに姿を窺し遠近は徘徊し
 て江湖上の動靜をさぐり聞うち早くも其年暮て治承四年となりつ然るよ今年ハ木曾路よハ
 義仲起り伊豆に頼朝旗揚げたまふと聞へしかハ驚破此時よと義經公ハ弁慶海尊共外手勢
 廿余人を俱して奥州より登り駿州浮島が原なる頼朝公の陣に至りたまふよぞ頼朝公ハ絶て
 久しき同胞の御對面よ互に手を取かハし不覺涙にくれたまひぬこれよりして辨慶ハ束

の間も君の傍をはなれず平家追討の折から豫て意恨ある五條大納言を打とり師父觀慶阿闍
 梨の怨を返す一の谷の戦ハ八島の合戦ハ軍忠數回よして平家全くと亡びし後も堀川夜討の功
 名その他義經公舎兄の不興を蒙り再び陸奥に吟行たまふよ及んでなほ附添終り文治五年衣
 河にて立あがら終りを取し事に至つてハ普く坊間に流布する所の軍記野乘よ載て詳なれバ
 予が筆を勞するよ及ばず然あれ尙遺漏なきにしもあらはず且腹稿いまだ吐盡さずといへども
 書肆頻よ肩を結ばん事を促をもて姑く茲よ筆をとむ猶他日新研を開くとあらんかし

柳魚再按するに本朝武家高名記よハ(鎗鬪分捕卷之六)文治五年衣川の御所よ於て辨慶
 三十七歳にして主君と同死せり依之子孫なしといへり是を以て見るときハ辨慶ハ仁平三
 年癸酉の出生歟同書(感狀之六)兵糧米借用狀を載たり其文よ曰

今度芳野入既令議定就兵糧米闕如之時節米十石頼思召
 候則友成之御太刀一腰被指遣之候此度之儀如何共才覺
 專一也

文治元年十一月十日

西塔武藏坊
辨慶印

尻崎老中

此書今猶彼處にありとみん未見す専ら人口よ膾炙する攝州須磨寺にある所の若木の櫻の制札 此花江南所無也云々の只梅の制札なるを好事の人源氏物語須磨の巻よ若木の櫻咲そめてといへる又附會して光源氏を源九郎よあやまれる者にして辨慶が墨跡よあるべからず此事既に岡西惟中が續無名抄及び蜀山翁が南畝莠言に見たり
源平盛衰記に元暦二年三月廿一日熊野別當堪増二百余艘の兵船を調へて漕來り源氏に加ふる事を載たり和漢三才圖會の説よ依ときハ此堪増ハ辨慶が父辨正か尙考ふべし

武藏坊辨慶物語卷之十大尾

明治十九年七月廿六日御届
全 年八月 出版

定價金壹圓廿錢

編輯者 未 詳

東京府平民

出版人 出 雲 與 吉

京橋區銀座貳丁目壹番地

發 兌 金 龍 閣

同 所

日本橋區本石町壹丁目

印刷所 常磐木活版所

東 京 專 賣

辻 兔 春 鶴 上 鈴

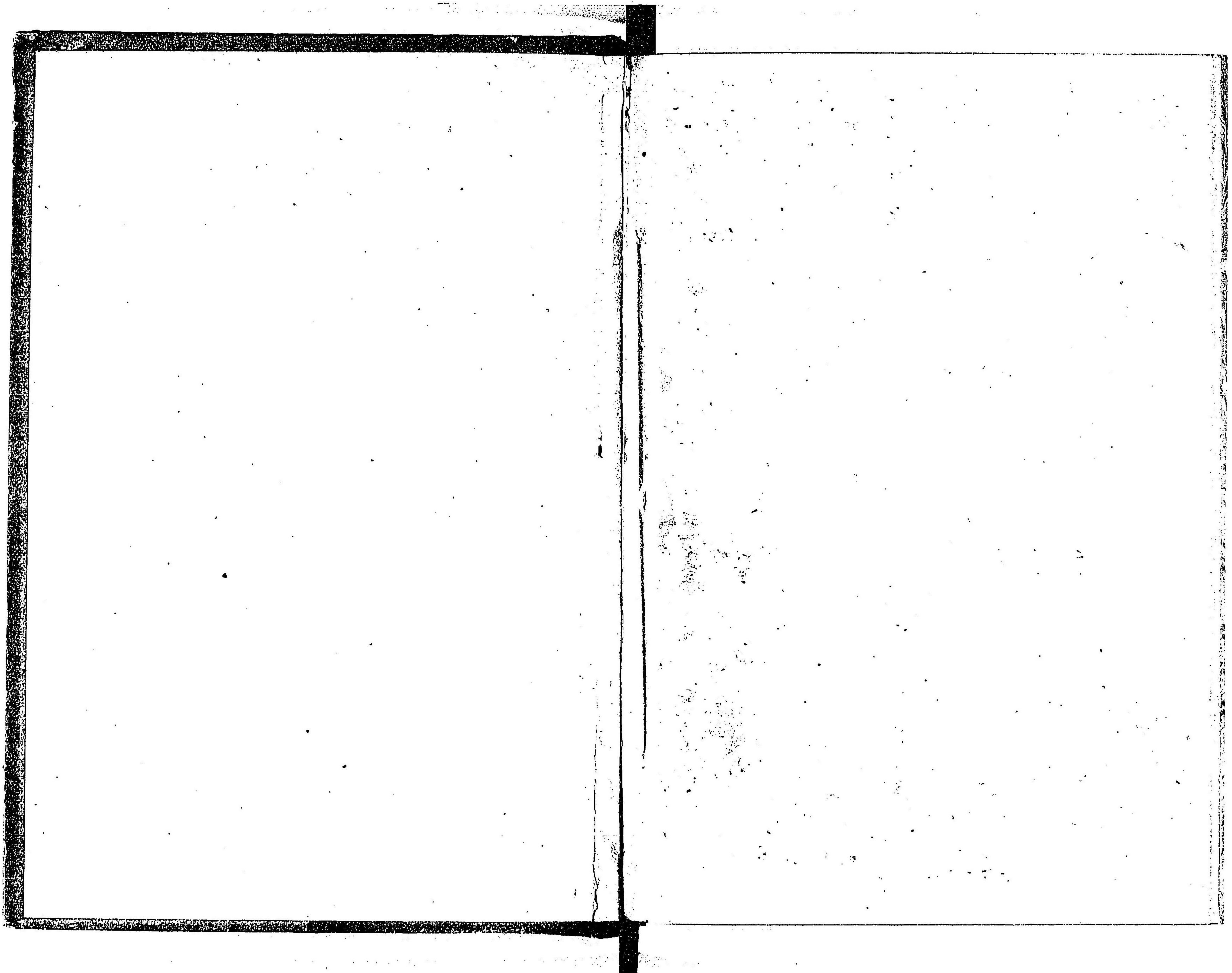
陽 聲 田

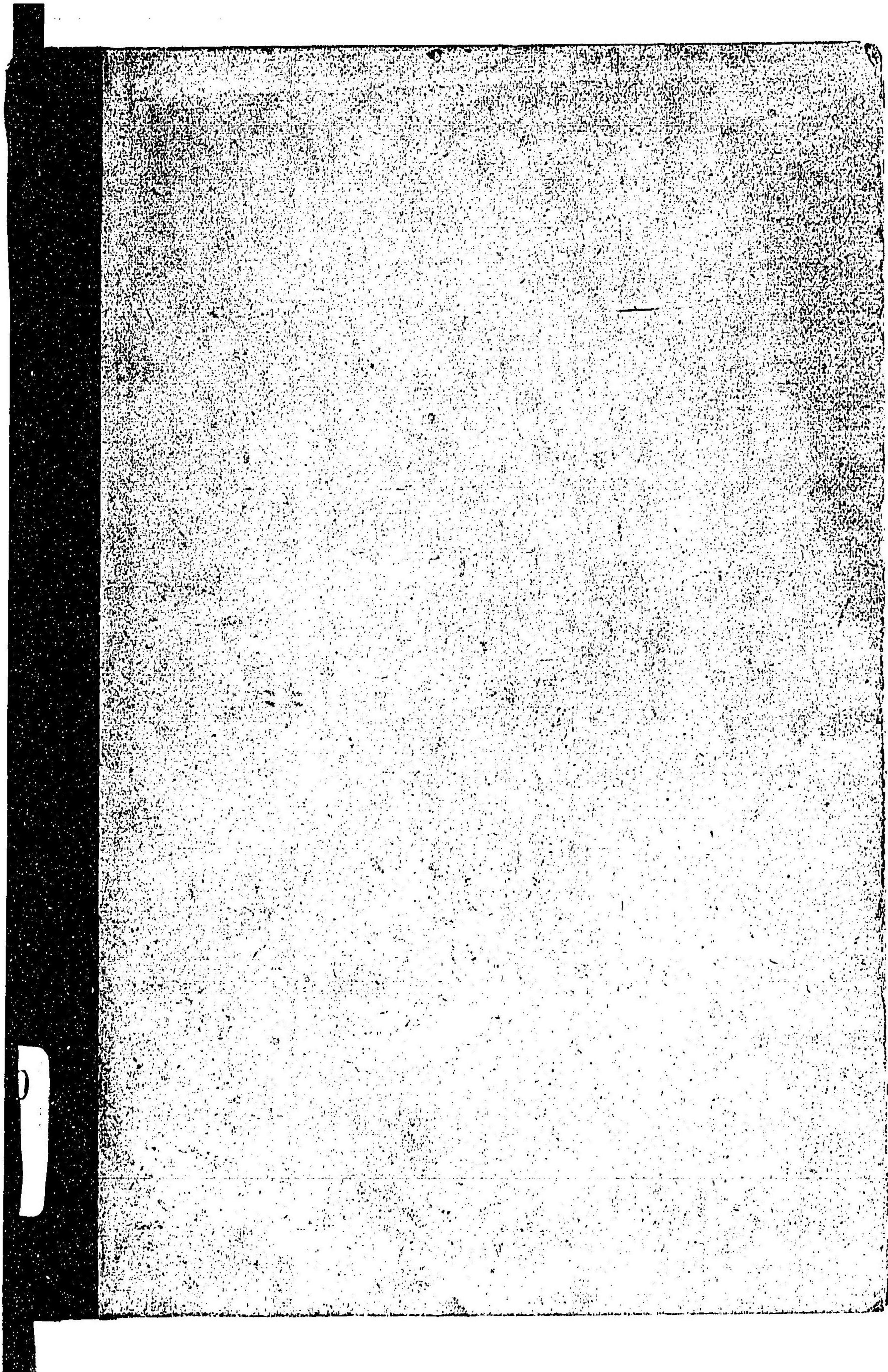
文 屋 堂 社 屋 木

伊 大 山 自 內 永

勢 倉 由 閣

金 藤 藤 堂





武蔵坊弁慶物語
全

091438-000-1

特10-706

武蔵坊弁慶物語

白頭丸 柳魚/編

M19

DBN-2351

